

京都天文史跡めぐり【3】

～星に願いを 大原・三千院～

有本 淳一（京都市立塔南高等学校）

1. 星に想うこと

突然ですが、みなさんは星空のどんなところに惹かれますか？星を見て何を思いますか？ある人は宇宙の始まりや広がり、またある人は系外惑星や地球外生命のことを。何かロマンというか、謎というか、そのようなワクワクするようなところに惹かれている人は多いのではないのでしょうか。また、それとはまったく異なり、ただぼおっと星空を眺めているだけで引き込まれてしまう、科学的なことは少しおいておいてあの美しさに惹かれているという人も多いのではないのでしょうか。いまさら言うまでもないですが、宇宙は神秘的でいろいろな感情や想いを私たちに抱かせてくれます。

いろいろな想いという意味では、私たち人類は星を見て世界や国家、あるいは自分自身の運命をそこに映してきたという歴史があります。すなわち星占いです。これは洋の東西を問わずに古代から現在に至るまで、最も身近に星を感じさせてくれているものではないのでしょうか。宇宙を科学的に楽しんでいる人や、天文学に興味がある人でも、何気なしに出勤前のテレビの星座占いは毎日必ずチェックしたりしていないのでしょうか。そして、良いことが書かれていたりすると、その日一日何だか上機嫌で仕事に励めたりしないのでしょうか。

星は私たちの日常生活には昔も今もなくてはならないものです。一つは暦を作ったり、時刻を決めるために、もう一つはこのような占いのためです。少し前置きが長くなりましたが、占いは現代の天文学とは無縁のもので、科学の体系とは別のものです。しかし、古代の世界観であったり、昔の人々の星への想いを知る上では大変重要な手がかりです。今回はそんな占いの中でも仏教に根ざしたものを紹介してみたいと思います。

2. 仏教の世界観

仏教の世界観といわれると、みなさんはまず何が頭に浮かびますか？キリスト教なら聖書に書かれている世界でしょうが、仏教はなかなかピンと来ない人も多いの

ではないでしょうか。仏教でもやはりその経典に世界観を求めるのが一番良いでしょう。しかし、いわゆるお経は難しく、仏様の名前も難解ですね。お寺のお坊さんに説明してもらったら良いのですが、話を聞いただけではこれもよくわからない。おそらく何かありがたい世界がそこにあるんだろうけど、一体どうすればわかるのだろうか・・・？

こんな感覚はどうも私たち現代人だけではなかったようです。仏教の世界観、経典に書かれていることをビジュアルに表現し、それを多くの人に知ってもらおうという努力がずいぶん昔から行われてきたからです。お寺にある仏像がその典型例ですし、もっと忠実に経典の内容を表したものが曼荼羅です。

曼荼羅にはいろいろな種類がありますが、最も有名なものが両界曼荼羅です。これは胎蔵界曼荼羅と金剛界曼荼羅からなるもので、胎蔵界曼荼羅は「大日経」、金剛界曼荼羅は「金剛頂経」の世界を表したものです。また、空海にいたっては、自らが大陸で学んできた真言密教の世界観を表すために、絵画だけでなく、仏像21体を立体的に配置して立体曼荼羅を教王護国寺(東寺)に作りました。(東寺に立ち寄られることがあるなら講堂にあるこの立体曼荼羅をぜひご覧ください。圧倒的なスケールで迫ってきます。)



図1 東寺の
五重塔



図 2 立体曼荼羅
のある講堂

このような曼荼羅の中で、元となる経典が存在しないものに星曼荼羅、あるいは北斗曼荼羅と呼ばれるものがあります。文字通り曼荼羅の中に星や北斗七星が描かれているのです。星曼荼羅は描かれている星が円形に配置されているものと、方形に配置されているものに分けられますが、まずは登場する星を紹介しましょう。中央には本尊(釈迦如来)があり、そのまわりに、九曜(水星、金星、火星、木星、土星、太陽、月、食を起すもととなる星(“羅ご”と呼ばれる仮想的なもの)、彗星)、北斗七星、さらに黄道十二宮(いわゆる星占いの星座)、二十八宿(月の通り道にある28の中国星座)が描かれています。これはまさに当時の宇宙観を描いたものといえるでしょう。特に北斗七星の中の二重星ミザールとアルコルがしっかりと、二つに分けて描かれているあたりは単なる宗教画というレベルでは片付けられないような気がします。

ではこの星曼荼羅は何の目的で使われていたのでしょうか。それは、密教の加持祈祷の一つである除災や延命を祈る北斗法を行うときに、本尊として祭壇に奉られていたのです。つまり、災害に見舞われないようにだとか、健康で長生きできるようにということを星にお願いしたということなのです。しかも、祈願するときには、ただ単に星曼荼羅に向かって祈るのではなく、その人の生年月日によって割り当てられる北斗七星の中の一つの星(いわば守護星のようなもので本命星といいます。)や、年ごとにその人の運命を左右する北斗七星の中の一つの星(当年星といいます。)について供養をおこなったのです。こうなると祈願というよりは星占い

に近いイメージになりますね。星座占いならぬ北斗七星占いといったところでしょうか。

3. 星曼荼羅への祈り

星曼荼羅への祈願は星供(ほしく)あるいは星祭りなどと呼ばれています。天台宗や真言宗といった密教系の寺院では1年に1度、多くは節分の際に行われることが多いです。その中で大原・三千院を紹介したいと思います。(ただし、こちらは2月28日に行われます。)



図3 三千院山門



図4 金色不動堂

三千院は天台宗五箇室門跡のひとつで、洛北・大原にあります。境内はおよそ2600m²で往生極楽院をはじめ、池泉鑑賞式の庭園など見所もたくさんあって、常に観光客でにぎわっています。そんな三千院の山門から最も奥に進んだところに金色不動堂というお堂があります。ここで星供が行われるのです。

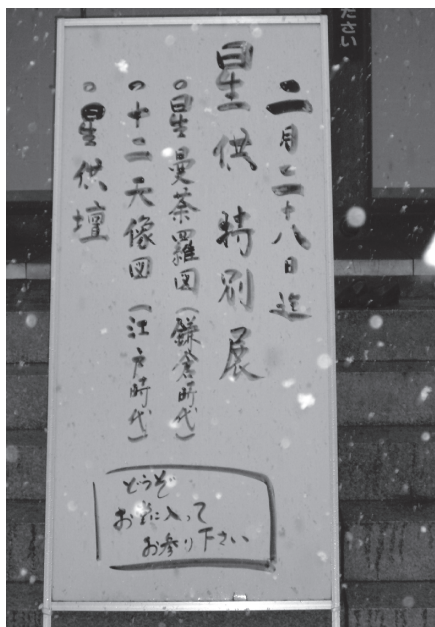


図5 雪の中の星供の案内

星供は三千院の Web ページによると、2月28日の午前11時から始まり、この金色不動堂の扉をすべて閉め、完全に外の明かりを遮断した上で、ろうそくを灯し、大宇宙の星空を密壇の上に顕現させる法要とあります。そのときには星曼荼羅だけでなく、十二天図(つまり、黄道十二宮に対応するもの)も祭壇のまわりに奉られるそうです。

この金色不動堂で公開された星曼荼羅と十二天図は私も一般公開のときに拝観したのですが、星供には参加したことがありません。今年の冬は天文学とは違ったアプローチで大宇宙の星空に想いをはせてみようかと思えます。

東寺	(教王護国寺)	南区九条大宮
創建	延暦十五(796)年	開祖 空海
国宝	重文 多数	世界遺産 五重塔はわが国最高 55m
三千院		左京区大原
創建	延暦年間	開祖 最澄
国宝	重文 多数	もみじの名所